

## 半沢直樹の信念

校長 金塚 一明

あの半沢直樹が部下の森山に「自分の信念だ」と語った言葉

一つ、正しいことを正しいと言えること。  
一つ、組織の常識と世間の常識が一致していること。  
一つ、ひたむきで誠実に働いた者がきちんと評価されること。

「この当たり前のことが出来ていないから戦うのだ」と半沢は言葉を続けます。小説(テレビ)の中の話ですが、学校教育にとってもこれからの未来を生きる子どもたちにとっても大切にしたい言葉だと思って心に留めました。

半沢直樹シリーズを書いたのは池井戸潤氏。半沢直樹が熱く語る言葉は、つまり作者である池井戸潤氏の言葉です。

※1963年岐阜県生まれ。慶應義塾大学卒業。1988年三菱銀行入行。1995年32歳で退職し起業。

1998年江戸川乱歩賞、2010年吉川英治文学新人賞、そして2011年「下町ロケット」で直木賞受賞。

池井戸潤氏は、就職活動をしている若い人たちに向けたあるインタビューの中で次のように話しています。

◆僕が社会に出て20年あまり。食べていだけで精一杯で目の前のことを必死でやっていた時期もありますが、少し落ち着いて過去を振り返れるようになった今、実感していることがあります。それは「自分のためにする仕事は仕事じゃない」ということです。仕事とはお客さんのためにするもの。社会のためにするものです。  
◆20代や30代で人生の勝敗は決まらないということも覚えておいてほしいですね。人生は大小さまざまな勝負の積み重ねです。就職活動で思うようにいかず、落ち込む人もいるかもしれないけど、一生懸命やっている人が負け続けることはほとんどありません。ダメなのは、1回うまくいかなかったといって努力をやめたり、あきらめたりしてしまうこと。そうすると、負の連鎖で次もうまくいきません。だから、1回や2回ダメでも、へこたれないでほしい。勝負が見えてくるのは70代以降。僕だってまだ先は分からないんですから。  
◆新しいことにチャレンジすることを止めたら、すぐ右肩下がりになります。これは作家に限らず、どんな職業にも言えることだと思います。

「仕事」「働くこと」に対する池井戸氏の信念であり、強く共感します。

目の前にいる山田小の子どもたちもいずれ社会に出て、多くの人たちと共に働き、社会に貢献していくこととなります。

池井戸氏が言うように、社会のために一生懸命チャレンジしていける人間になってほしいと願っています。

そのために、私たちは、『今』の指導が子どもたちの『未来』へつながる指導となっているかを自覚しながら子どもたちに向き合うよう努めています。

山田小学校の合言葉だと繰り返し伝えている言葉は「笑顔」と「一生懸命」。

「笑顔」とは、誠実により良い人間関係を作っていく力であり、「一生懸命」とは、学びに向かう意欲や努力・チャレンジ精神を表しています。

私たちが山田小の子どもたちに育てたいと考えている力です。

半沢直樹の信念、池井戸潤氏の言葉と同じだと思っています。

\*

コロナ禍の中、もうすぐ一年が終わろうとしています。

たとえ、どのような状況になろうと私たちが子どもたちへ向ける想い、信念は変わりません。これからも一生懸命にチャレンジを続けていきます。

一年間、山田小学校の教育活動にご理解とご支援ご協力をありがとうございました。

来年の丑年がいい年になりますよう願っています。よいお年をお迎えください。